

僕は、バス釣りをしますが、モロコやゲンゴロウブナの減少は、外来種の所為にされていますので、いつも腹立たしい思いをしています。本来あるべき”在来種を増やす”というテーマについて、考えるべきなのに、外来種、害魚論に刷り返られています。食害なら、ケタバスやヨシノボリの方が昔から、2 km魚を追ったり、産んだ卵を食べています。しかし、その彼等さえも少なくなっていると言うことは、水質の悪化が在来種減少の大きな原因であることは否めません。また、ブルーギルやバスを琵琶湖に入れたのは、漁協であって、バスアングラールではありません。その生態を無視して琵琶湖に投入し、食べることもしないで、バスのもう一つの特徴である釣ることを敵害視することは、本末転倒です。”在来種を増やす。”というテーマには、ヨシや葦原の保存と回復で、在来種の産卵場所を確保し、鯉やバスなどから食べられる時に逃げる場所を確保することと密接な関係を持っていると思います。遙氏の川や琵琶湖を見るために、利用する場所を確保することは、川や琵琶湖を理解する場所と言うよりは、人間の自分勝手な場所を確保するに等しいです。琵琶湖は、葦があって全然進めない場所が有ってもいいです。それが自然ですので、そのことが在来種を増やすことと同じと考えます。在来種は、漁師が網で魚を取る方が、はるかに大量に減らしています。”集団ヒステリーによる大きな誤解”はどこにでもありますし、その集団ヒステリーにかかった人は、他の人の意見を聞きませんし、人間の理性を持ち合わせていないのではないかと思うことも有ります。建設族などは、自分が儲ければ、すぐ後の自然がどうなっても、子孫に譲る自然がどうなっても、意に介しません。今のダムを建設することしか考えていません。他の人の意見を聞かないのです。ダムのあとあとのケアはどうなるのか？と言うことより、ダムのコンクリートの厚みのことしか考えていません。

こんな方々の意見は、参考にこそなれ、採用するに足りません。川の堤防の件でも、”何故高くしなければいけないか？”の議論が抜けています。それは山の保水力が、ゴルフ場や森林を杉林にしていること、そして、皮肉にも大きなダムを建設することによって、山を崩すことにより保水力が失われているのです。ゴルフ場に至っては、農薬を撒くという暴挙により、更なる保水力を失っています。余談ですが、海の魚や川の魚が安全食べられるかどうかは、山にゴルフ場が有るかどうかにかかっていることがあります。背の曲がった魚は、棄てられているだけです。・・・人間のおろかさを思い知らされますね。いえ、日本人のおろかさと言うべきでしょう。いつも浅はかな考えで、何かやり、災害がやってきたら、狭い範囲でしか考えない。後々のケアを考えていないのです。有名大学を出ていながら、自分の専門以外は、わかりませんと言うのは、情けない限りです。本が出ているのだから、インターネットがあるのだから、いくらでも調べて学ぶことは出来ます。広い知識のもとで考える努力が、「本当の解決」を産むのだと思います。